

ICT活用授業模範

実物投影機で拡大、学習計画表作成
教科書を共通教材にして



リコーダーの指使いを確認する子どもたち

いために、一度立ち止まって振り返らせるための場面を設定。子ども自ら評価させることで、「分かった」「よく分らない…」などの意思表示をするようになったという。

同校では、教科書を共通教材として活用している。例えば、音楽の授業では合唱の時に教科書の楽譜を実物投影機で大きく映して提示したり、算数の授業では振り返りの場面で教科書の三角形の定義を大きく映して共通理解を図ったりするなど。

このほかにも、単元の初めに学習の見通しを持たせるために教科書を使って「学習計画表」を作成している。この計画表には、学習する教科書の

また「分かったこと」には傍線、「疑問に思うこと」には点線を引くなど、教科書に書き込みを入れることで自主学習や自らの学びを振り返る姿勢へとつなげている。家庭学習の習慣化を図るために、学級活動では家庭学習の指導なども行っている。

「子どもが分からないと言ったり、宿題をして来なかった子が今日の授業でどのように発言したかを見届けた授業構成にする必要がある」と評価について課題を挙げる清水校長。今後もバナソニック教育財団の特別研究指定校として、ICTを活用した授業の在り方について模索していく。

本荘小 ☎058・251・0422

ったのが道徳の授業。キーワードの言葉をきちんと黒板に書き残すことで、登場人物の心の動きや変化を板書から読み取ることができるためだ。子どもたちが活動して分かったつもりにさせな

同校は昨年度までICTを効率的に使うことに主眼を置き、黒板には掲示物を張らずに映像を見せるなどして授業準備のスリム化を図ってきた。

そのため、清水校長は「課題を読みこなすというワンパターンの授業だった」と話す。

そこで、子どもに分かるという意識を持たせるために板書や学び合いが大切だと考えた。このように考えるきっかけとな

ページ数や何が分かるようになるたいかなどを、子どもたちが記入している。国語と算数を中心に取り組んでいるが、必要に応じて他教科でも作成しているという。